

可認物便郵種三第省信遞日六廿月二十年一十三治明
(行發(日五十、日一)回二月每)行發日一月三年五十三治明



改教時報

第七十四號

目次

社説

外交の成功に際して實業家の奮起を望む

論説

貧民窟の宗教(二)

安藤鐵腸

佛教徒と女子教育

松島肇

社會

◎未丁年者禁酒法案 ◎宗教法制定の請願 ◎會頭久我侯爵巡回
日誌 ◎岡崎より ◎教界彙報 ◎紛々錄

雜錄

先德餘香(其十一)

文學士 本多高陽

佛教辨士の評判

自稱辨士

信界

何とか信心といふ

上杉文秀

今昔

前田利家

百目木劍虹

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作りしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

社論

- 政教時報第七十三號目次
- ◎政黨撲滅論……………(小藤鐵腸)
 - ◎貧民窟の宗教……………
 - ◎軍隊の凍死◎軍人分捕事件の暴露
 - ◎平凡なる議會◎骨牌稅、禁酒法案◎宗教法と政府者及各宗委員◎教界彙報◎紛々錄
 - ◎放言(一)……………(鎮屯溪)
 - ◎前田利家(緒論)……………(百目木劍虹)
 - ◎智識と疑惑……………(赤松天風)
 - ◎育兒談……………(文學士白山生)

家信 雜 錄

本誌廣告

- 一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
- 二、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 三、本誌代金は必ず小爲替にて逕送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 四、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無遞送料

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
 爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部
 東京市本郷森川町一番地
 發行兼編輯人 百目木劍虹
 印刷 清水朝太郎
 明治三十五年二月廿八日印刷
 明治三十五年三月一日發行

政教時報

外交の成功に際して

實業家の奮發と望む

日本とは支那の一省なりとか、若くは 屬國なりとかいふ如き、間違たる考の歐米人士の間に傳播せし昔は擧置さ、日清戰役以後、日本は世界の一強國なりと許され、日本の陸軍は世界無比の強國なる軍隊なることを知られ、世界の全局面に對しては兎も角、極東問題に對しては、日本の意向を度外視することは、世界の最大強國と雖も躊躇するに至れり、然れども、日本の有力を認められたるは、將來は僅に陸主海從の軍隊の勇猛なるにありたり、換言せば日本帝國の名譽は殆ど其全體が軍隊の名譽にして、日本の恐れられしは即日本の軍隊の恐れられたるに因る觀ありて、日本はその軍隊は強けれども、外交は至て拙なり、日本人は勇武なれども外交的能力は缺乏せりと評せらるゝに至り、日本國內に於ても、亦軍人は此世を我世とれもひて跋扈を極め、軍人以外の者も、亦此現象を是認し、日本軍隊は勇強なれども、日本の外交は未だ拙劣を免れずとし、實際日本人は外交的能力に乏しき所あるか、將た世界の外交場裡に立つ日淺きを以て、未だ幼稚なれども大に發達の望ありやと疑惑を生せる者も少からざりしなり、第一流の大政治家揃の伊藤侯陸奧伯にして、猶三國干渉

の厄難に逢ひて見苦しき失敗を演せしを見れば、此難見此疑感は強ち杞憂にあらざりしならん、然るに所謂第一流の大政治家が舞臺を離れて、少壯外交家が局面に當るに至て大に我帝國の外交界に新生面を開くに至れり、挽近數年の歴史を繹ぬれば、廿七八年の日清戰役は、我帝國に取りては、軍隊の成功と外交の失敗とを以て歴史の頁を埋むれども、北清動亂の始末は軍隊と外交と共に成功を以て白紙に印するを得るなり、殊に外交の成功や、軍人に續職問題などあるに比して優に一頭地を抜けるものといふべし、列強聯合の交渉に於て、北京の外交界に我當局者が、他列強に比して決して遜色なきは勿論、かの滿洲問題に於て露清が秘密に秘密を盡して、列強を出し抜かんと努めたるをも、再度まで逸早く之を嗅ぎ付けて、其締約を成就せしめざりしもの、已に我從來の外交の緩慢なるに比して、成功と言はざるべからず、况んや今回の日英同盟の如きは、世界の外交家が鶴の目鷹の目にて注意を怠らざる間に立て、斯る同盟を締結したるは、實に一大成功にあらざるや、日英同盟が將來に如何なる結果を持ち來すかは、暫く置いて問はざるも、列國環視の中に立て、此強固なる攻守同盟を締結したるの手續、以て優に日本人は外交的能力は缺乏せりと無禮なる評言を爲さざらしむるに足るべし、唯此一事列強の外交社會に發言權を大ならしむるもの多大なりといふべし、邦人も亦其外交的能力に於て大に自信して可なり、是に於て余輩大に望む所あり、他なし實業家の奮發是なり、

日本の商工業は世界の表面に立て未だ大なる聲價を有せざるあり、從來帝國の商工業が世人に漠視せらるゝは從來の外交と異なるなし、今日と雖も猶商工業に於ては、英米諸國と比肩すべからざるは勿論、敗陣の清國人にすら及ばざるもの如し、是豈終天の恨事にあらずや、國家が軍備のみを以て立たざるは、今更言ふまでも無けれど、軍備と外交と駢進したりとて、決して十全の進歩といふべからずして、猶其進歩發達は不具の状態にありと言はざるべからず、商工業の進歩發展にして軍備外交と相待て駢進するに至らば、先づ完全に近き國運の發達と稱し得べきなり、實業にして今の日本の如く、幼稚なる間は決して未だ十分に帝國萬歳を慶祝すべからざるなり、故を以て余輩は此際商工業家の奮勵を望むや頗る切あり、况んや、今回の日英締約を以て、清韓兩國は優に保全せられ、東洋の禍亂も俄に起るべくもあらず、清韓兩國も亦深く我國を德とし同情を表すべければ、我利益線を此兩帝國に向て伸長するは、極めて利便を得易かるべし、此方面に向て我利益線を十分に伸長するを得ば、我商工業の發達は蓋し無限なるべし、實に我商工業家の奮發すべきは、今日を於て他にあらざるなり、然りと雖も、如何に今日は我利益線を大陸に伸張すべき好時機なりとて、叩りに投機者流の行動を恣にせしむべからず、從來我國の實業界は實力を以て一攫萬金を夢想する投機者流に蹂躪せられしこと多し、我商工業の進歩を妨げ、實業の發達を不健全ならしむるもの此流の徒の跋扈より來るもの多し、外國市場等に於ては、國家の信用品位に關す

るもの大なれば、猶更此徒の行動を監視し、跋扈を防遏せざるべからず、要は健全なる商工業家の秩序ある計劃の織出して成功せんことを祈るなり、願くは紳士紳商と呼ばれ常に我社會の上流に在りて、經濟界に重きを爲す眞面目なる商工業家、此際奮勵一番して貢獻する所われ、

論 說

貧民窟の宗教 (二)

安藤 鐵 腸

彼等は自暴自棄の結果、或はその社會に馴致したる結果、奮勵勉強して身を立て家を興さんとの考がない、從て神に祈り、佛に誓ふといふ現世祈禱も行はれぬ、然しながら一朝事變あるに際しては、彼等は普通の社會の人の、それに對する態度よりも、更に一層の熱心を以て現世祈禱を凝らすことがある、例へば此の廓の中の一人が重病に罹るときなどは、多くの人が集りて、大井戸を取り圍み、冷へ凍る寒天をもものどもせず、素裸になりて頭より水を浴み、大山大聖不動明王を念じ、六根法淨を誓ひて病氣平癒を祈るのである、これから見ると彼等にはたしかに現世祈禱の觀念があるが、咽元過れば熱さを忘れて其人の病氣が平癒するか、若し其功なくして死亡するか、何れにしても一段落を告ぐれば、早や忘れた様

になつて、神佛に祈願することなどはないのである、現世祈禱にすら此の如く冷淡である、况んや未來とか、來世とかいふ、進んたる宗教觀念ある筈がない、然れども彼等の間には一種の乞食的宗教がある、それは外でもない、身を巡禮に裝ひ、人の門に立て、物哀れに御詠歌を詠じて一文二文の施しを受くるのである、これは重にも女であつて男には多く見受けぬ、東京市中を徘徊する巡禮は多くは此の仲間であつて、實際の巡禮ではなく、全く一種の商賣である、この邊から見ると宗教とは何の關係もない様であるが、たゞひ物乞であれ、商賣であれ、毎日御詠歌を詠じ、南無觀世音菩薩を唱ふるうちには、いつとなく彼等の宗教觀念を喚起するものと見え、これ等商賣以外、物乞以外に御詠歌を詠することがある、それは此の廓の中の一人が死亡する時は、必ず多くの似而非巡禮先生が其家に集り來りて、一人聲高に調聲すれば、他の者は之に和して次の句を詠じかくして一夜を通して亡者に廻向するものである、こゝに至ると勿論明晰ではないか、勢態として未來を認むる觀念があるらしい、

彼等の家の多くには神棚がない、勿論佛壇はない、人に對してさへ敬禮を知らぬ輩であるが、殊更目前に見ぬ神や佛を崇敬することを知らぬ、然しながら此の社會の中にも時として熱心なる篤信者がある、寧ろ狂的信者がないでもない、それは多くは日蓮宗の信者である、家の中を御札で張りつめ、長者の萬燈ならぬ、貧の一燈を常燈明として、朝より夜に至るまで、太鼓を打て南無妙法蓮華經を誦する、半狂人の信者

を見受けることがある、これは勿論現世祈禱であつて、此の社會には先づ異例といつてよい、之を要するに貧民の宗教觀念は極て薄弱である、智識の卑いのだ、其日の生活に追はれて他を顧るの違なきかその原由である、折にふれて現世祈禱を爲すが、それは一時の現象では彼等の常態ではない、未來の觀念の如きは、只勢態として死後を吊ふといふに止り、進んで安心を求むるに及ばぬのである、一言以て之を蔽へば貧民窟は無宗教である、

(未完)

佛教徒と女子教育

編者曰く松島氏は女子教育に就て頗る注意さるゝ人なりと頃日平生の所思を記して此篇を投せらる、即ち收めて本欄に載す

松島 肇

砲聲一度浦賀灣頭に轟きて幕政三百年の懶夢を攪破するや人心恟々として過く所なく怒濤驚瀾の觀を致せしと雖、王政維新の事ありて紛糾悉く此に解け、和風徐ろに吹て頻りに泰西の文物を輸入し、彼の長を取て吾が短を補ひ、能く歐米の粹を同化し得て百般の事物革新の光彩を添へ、國運暖々として駟馬の走るが如く、日進月歩して益々隆盛の域に赴き、東洋の盟主を以て稱せられ宇内最強國の列に入り、今や將に歐米の開化を凌ぎ東方自ら特得の文明あり加之上萬世一系の皇室

を奉獻し、天長地久、千秋不動なる大日本國體の精華は實に萬國に冠絶し、世界廣し萬國多しと雖斯る金匱無欠の國體たる何處にかある

然りと雖然々世態を鑑みるに真に長大息に堪へざるものあり、曰く道義の銷亡は是れなり、試に思へ今日之社會は如何なる社會なるかを、人心腐敗し徳義地を拂ひ上下各其軌を脱し他を倒し已れを専らにし、天を誣ひ心を欺き詐欺相對し詭譎相應じ、以て處世の實を得たりとなし更に愧ぢざるもの、如し、豈に慨歎の至りならずや、然り而して道義の獎勵者たり徳教の扶植者たる宗教は如何、特に我國民の殆んど全體が信奉する佛教界の状態は如何、弊實積で永く迷界を照さず、階級儀式の末節に拘泥し宗派の偏頗心に驅られ頑固にして時勢を察せる幾萬の圓顛は殆んど醉へるが如く睡れるが如く動しも活氣なく、徒に幕府時代の遺風封建の高祿を夢想し、一時の榮華に惰眠を食ひ恬として慚づる色なく、纔に暗昧なる愚俗に對し死教を説て能事足れりとし、其過まれるを悟らず、是以て法門の控弦日々振はず氣息奄々として死に瀕せる者の如く、時世に後れ學術思想界の潮流に乗る能はず、國民教育の發達に伴はず獨り退歩の途に就き望を佛教に絶ちて寧ろ他の宗教に皈するもの類々として輩出する所以あり、豈塞心の至りならずや、若し夫れ此時に當つて佛陀の慈光に浴する吾人佛教徒たるもの見て以て黙過せん乎、幽玄高妙なる我教法は淺薄なる宗教の爲めに蹂躪さるゝや自明の理なり、宗教の生命は信仰にあり今や既に業に信仰を他宗教に蠶食せら

れつゝあるを見、いかで佛教の前途を憂慮して洪歎を發せざるを得むや、

抑も佛教は決して僧侶の専有に非ず、そは是れを水久維持して以て祖先の靈魂を慰め、尙且つ吾人の安心立命を得る取依の標榜なればなり、果して然らば佛教の衰頽に傾く丈け其れだけ吾人靈性上の不幸を招くものなり、されば吾人は如何にもして佛陀の妙法を宣布し、永く後昆に傳ふるの方法を講せるべからず、而して其法種々ありと雖も功の偉ある教育に過ぐるはなし、男子の教育は輒近漸く各宗共々刷新を加へつゝあるを以て且く措て之を問はず、女子の教育に關しては聊か微衷を吐露せざるべからず、思ふに元來女子は最も感情の念に銳きが故に、宗教的觀念は男子よりも却て健全なり、若し一朝宗教の感化を受けんか、其家庭は勿論子孫に至る迄其感化力の迫るや争ふ可からざるの事實なり、彼の宗教改革者ルーテルの如き又有名なる愛國者コイヒラーの如き、皆母親の善良なる家庭の薰化に基因するものなり、故に宗教家は女子教育に最も重きを置き純然たる感化を與ふるを怠るべからず、然るに現時の佛教家を見るに毫も之を意に介せず等閑に附せり、何を過まるの甚しき、

吾人は未だ曾て佛徒に依て完全なる女子教育の計劃あるを聞かずと雖、佛教各宗の此舉に出でざるは蓋し財政上餘裕なきに出づるもの、如きを以て吾人は敢て是れを責めず、苟くも我國現在の各宗教中最も故き歴史を有する佛教にして、而かも女子教育機關の存せざるは如何、或は知らず之れ吾人佛

教徒の不熱心なる結果に非らざる歟、反之基督教は較々信仰を強ゆるの嫌ひあるも此に大に鑑みる所あつて、熱心なる信徒發起となり拮据經營盛に學校を設け優に女子教育を施し、

一は以て社會に貢獻し一は以て基督的感化の普及を計るを以て、其効頗る著しく求道者の多く且つ熱誠なること佛教信徒の遠く及ばざるの感あり、基督教の今日あるは洵に信徒の熱心且つ教育に周到なるに職由す、嗚呼佛教徒諸君思ふて此に至れば奮起一番せすして可ならむや、竊に以て爲く今日女子教育事業を企圖すべしは吾人信徒の佛教に對する一大義務なり且つまた焦眉の急務なり、即ち吾人は佛教主義の最高教育たる一の女子大學校及び高等女學校を適當の地に設置して婦徳を涵養するに勉めざるべからず、斯くして進んで國家に貢獻し退いては婦女の信念を養ひ世の迷信を勸絶し、女子をして宇内の大勢に隨はする事決して無用の業に非らず、是れ吾人が女子教育に佛教徒の急務なりと謂ふ所以なり、而して其設立の經費及び維持方法に至りては精密の調査を缺くか故に謹みて大方の教へを請はんと欲す、冀くは佛教徒中贊成の諸君もあらは請ふ過に現實に設立方法を講せられん事を、由來佛教徒も事業を劃せざるに非らず急務を叫び問題を提出せざるに非ず、然れども其實熱誠なく形式的なるが故に畢竟幾多の事業も有終の美あることなし、苟子曰く風上に呼べば遠きに達すべし聲の大を加ふるに非ず勢の助くるあればなりと、宜なり言や上陳する二種の學校を設立せんには固より多額の費用を要すべきを以て、信徒諸君は彼我の別なく相提掣する

に吝ならず、献身的熱誠と犠牲的盡力を以て奏效の美を全ふせられん事を熱望す、庶幾くは大方の諸君其皮相を咎めず其真相を取れ諒焉、

社 會

未丁年者禁酒法案

未丁年者禁酒法案は衆議院を通過し今や貴族院に送られて委員に付托せらる、吾人は固より未丁年者が飲酒の弊害を認め、衷心之を匡濟を欲するものなり、之を以て該法案提出の精神に於ては深く賛成を表する者なりと雖も、法律万能を夢想して一篇の空文能く之を制し得べしと信ずるを得ず、われ弊の今日に及びしもの一に家庭の紊亂と社會の腐敗にあり、弊源依然として改むるなく法を以て妄りに之を箝せんとす過まれる哉、而して之を可決したるは敗徳汚行の最も甚しき衆議院なるに至ては實に滑稽と云はざるべからず、己を責むる輕くして人を責むるの重きをこれの如きか、然れども今日の議員諸氏すら尙ほ之を可決するの要を認むるに至らしめたる、未丁年者禁酒の任に當れる教育家の無能もまた甚だしと云ふべし、此際世の教育家たるもの該法律の成否に關はらず奮起一番宜しく大に少年の感化に力め禁酒の實を擧げられんことを望む

宗教法制定の請願

宗教法制定の必要なる敢て言を費やさずして明かなり、しかも今日に至る尙ほ其制定を見るなし、此に於てか各國の信徒諸氏は左の如き宗教法制定の請願書を政府に呈出する筈なり

宗教法制定に付請願書

伏して惟みるに現時我邦宗教法の制定や一日も之を忽諾に附すべからず宜しく本期議會に於て同法案を制定し國家永遠の計を確立せらるべきなり同法案は我徒に最大の利害を有するもの故に聊希望を述べて請願する所あらんとす佛敎は我國に弘布して以來一千有餘年國民大多數の信仰する所となり國民大多數の徳義を維持し文明の進歩に貢獻する多大なりしは言を俟たざる所とす而して既往佛敎各宗派の制度は本末關係の上に自治制を取り國教的組織を保持せし事亦喋々を要せざる所なり然れども國教的制度は我徒の希望する所にあらず之を國家の性質に徴し之を佛敎既定の習慣法に質すに須らく佛敎各宗派をして公法人の資格を有せしめ佛敎各宗派をして自治制を鞏固ならしむべし而して自治制に妥當にして必要なる保護と待遇とを定むる事は其希望の大要なり願くは賢明なる各位我徒の意見を容れ國家永遠の幸福を増進せられん事を謹しんで請願す

望を述べ、全く無事閉會したるは午後六時頃あり、然るに有志諸君は尙之に満足せずして一行の爲め浮月樓に懇親會を開くこととなり即ち一行は招待に預りて之に臨み會頭御禮の御辭あり次で本多學士は一行を代表して謝辭を述べ、杯酒献酬の間談熱して愈静岡市に於て

支部設立

の議纏り懇親會に列席したる諸氏は即座に發起者たることを快諾され茲に首尾能く會は成立したり和氣藹々の裡に散會せしは九時過なり左に發起者諸君の芳名を掲げて深く感謝の意を表すると共に今後益盡瘁されんことを望む

静岡市支部設立發起者人名

- 近松 金藏 森 寛一 中村 泰次郎
- 鬼頭 賢一郎 野村 兵一郎 木村 庄八
- 的場 源七郎 村島 録三郎 海野 音吉
- 杉原 喜兵衛 夏目 繁太郎 海津 米吉
- 小池 延次郎 富 田 美 黒 羽 清
- 棚 橋 氏 新 村 吾一 増 田 彦 太郎
- 野呂 精一郎 仁 藤 二六 山 崎 彌七
- 長谷 一學 別 府 繁 丸 丸 山 嶺 雲
- 天野 眞學 曾 我 守 尊 穴 山 鳳 樹
- 水谷 了故 能 村 惠

尙一行は翌廿一日岡崎に向へり

(以下次號)

會頭久我侯爵巡回日誌

静岡岡

●廿日 本誌前々號附録として本會擴張の激文を發表したることは讀者諸君の既に熟知する所あらむ、乃ち本會は當今の時勢に鑑み本會の擴張益々急務なるを認め、會頭久我侯爵を始め文學士本多辰次郎百目木知健及び曹洞宗城井一秀帥は共に本月廿日一番列車にて新橋驛を發し急行直に静岡に向ふ、車中諸種の打合せをなし三國一の富士山を眺めつゝ駿河灣を左にして走り午前十一時四十分豫定の如く静岡驛に着す、各宗僧侶並に他の有志諸氏停車場迄迎へられ侯爵一行直に旅館大東館に到る、既にして僧俗有志諸君續々面謁を請はる、會場は淨土宗寶臺院と定められ廳で演説の時刻來りしかは侯爵一行は車を列ねて會場に向ふ聞しに勝る大伽藍にして先づ一行をして意外の感に打たしむ、聽衆既に堂に滿ち殆ど立錫の餘地なきやに見受けたり、幹事開會の趣旨を述べ終りて第一席百目木知健氏人道と云ふ題下にて社會の腐敗を救済するには宗教を盛ならしむるに在るを説き第二席城井一秀氏は日本の宗教と題して日本人民をして悉く佛敎信者たらしめざるべからざるを熱心に説き大に聽衆に感動を興へ次に本多辰次郎氏は宗教と教育との關係に付一時間に渉る大演説を試み大喝采を博して壇を下り、最後に會頭の挨拶ありて無事演了し引き續き茶話會を開きたるに出席者二百餘名にして、初め會頭の御詞あり城井、本多、百目木の三氏順次に各々簡單に希

岡崎より

一昨日新橋一番發車に乗込み候、例の朝寝坊の事にて朝食の間もなく出發致候、車中高陽光を促して食堂列車に進撃し、した、かに召しあがり候爲め忽ち滿腹と相成候、併し列車の震動烈しく候事にて腹中聊か不穩の狀を呈し候、瀛車清水港灣を過ぎ候折り、一少女の望遠鏡を手に取りて車外 風景を眺むる有様少々を感し感じ候、去ながら濁れる世の中を倒視する一少女の心根こそゆかしき感し候、東海の雲空に屹立せる富士山はあやなく全身を隠し候爲め殘りをなく候、静岡市の演説會の模様は別報の如く非常の好況に有之候、大東館に一泊致候、地方有志諸君續々來訪の爲め應接に追あらず候、廿一日の朝は四時に眼を覺まし候、生に取ては破天荒の次第に候、今後も思ひ遣られ候、只今岡崎別院に居し候

廿一日

岡崎別院にて

劍 虹

教界彙報

- 本月九日午後一時より佛敎青年會發起となり、青森津離軍人串慈慈善音樂會を東京音樂學校に開く筈なり
- 去月廿四日佛敎主義新聞の編輯記者懇話會を上野の精養軒に催したり
- 宗教制度調査會設置に關する建議案は、去月十八日衆議院にて委員附托となり、天野若園兵等九名該委員に撰はれたれば不日本議に附せらるべし
- 眞宗言東寺々史は今度編輯することとなり、土宜法執師等其任に當らる、由
- 東京下谷區善養寺に事務所を置く大日本放浪院は、昨年十月大照圓明師等に依て設けられしものにて、現に應樂患者廿三名あり
- 信州光寺にては今度彼の智恩院の大梵鐘と同様の梵鐘を鑄造するに於て、其製造方を東京美術學校に托したり
- 織田得能師は印度佛跡調査の爲め去月下旬出發せり
- 琉球にて古來尊崇せるノロクモイ社を帝國の神と同一に認められんことを沖繩縣より出願せしかば、先般吏員を派し調査せしに、其眞體巫女の如く決して宗教と認めべきものにあらざるを報告せしが、尙來五月櫻井神社局長は同地へ出張する由

先德餘香 (其十一)

本多 高陽

◎五岳老師 近世詩書畫三絶と稱せられて、其名海内に噴々として、其筆にかゝるものは寸楮尺素と雖も、人之を拱壁に比して珍重措かれざる五岳老師は、姓は平野名は聞懸、又古竹と號して廣瀬淡窓の門人である、眞宗大谷派の僧侶で豊後國日田願正寺の住職で有た、資性最恬淡で是こそ慾は知らずい人で有たソ一な、併し人情には最篤い人で、法主を尊ぶことは非常なもので、本山から派遣せられた使僧が老師を訪へば御門跡様の御名代であると言て、頗る尊敬厚遇せられた、御法主様と言て懇稱を凝して筆を揮はれた密書は大谷派本願寺には澤山ある、夫故長く同派の執事を務めた瀧美契縁師などは矢張老師が根柢を籠められた、密書を所持して居られる、この老師の評番は古くより高い事であるが、東京邊で最名聲を揚げたのは、木戸松菊公の力である、松菊公は豫ねて五岳老師の畫を愛玩せられて、其眞筆を得んが爲に、明治六七年の頃でも有るか、態々使者を豊後まで遣し、金五拾圓を包み、絹地を持たせて揮毫を請はしめ、使者を戒めて總て文人などは人に催促せられて自分の氣に進まずとも餘儀なく筆を執れば、其出来必ず悪しきものだから、一旦頼んだら其後は

督促せずして、先方が氣に向いて畫くのを徐かに待つべしと、使者乃ち懇に來意を告げて依頼し、別に謝禮を呈す、老師は之を受けて禮金を絹地に巻き込みて棚に載す、其後使者は旅宿に在りて揮毫の成るを待つも、他に仕事も無ければ、日々老師を訪うて或は語り、或は爲に墨を磨し、或は揮毫の際紙等を伸したり巻いたり文鎮に成たりして、日々様子を窺へども、何時迄も我依頼せし分を揮毫し呉れず、殆ど半歳を空過した、木戸公は京に在て一日千秋と待ちわぶれど出来ず、使者も餘り待ち遠くもあり、又主人にも氣の毒なれば、或日一寸催促して見たるに、ラソー〜頓と失念して居たこと、其棚に有たのだからとて、練地を落るさせて開きしに巖に入れし謝禮も其儘ありしと、夫より押へさせて置いて早速筆を走らしたのは至て亂暴な疎書で有た、使者は餘り疎書で困たと思へど、詮方なく畫が出来たから直様發足して歸京する趣を報知して置いて歸た、木戸公は酒肴を具へ友人を會して使者の歸宅を俟て居ると、歸りて來たから、取る手遅しと抜いて見るに、頗る疎書なれば、公は心に不満で有たが、使者より詳細に此畫の出来た情由を聞れて、手を拍て喜び夫でこそ五岳だ、實に此畫も疎でこりわれ、其人物を見る様だ、此邊に幾らも有り觸れてある五岳といふものは皆僞物であるとして頻に稱讚して夫より甚く五岳を賞めて吹聴せられたから、老師の名も愈が上にも高く成た、

◎威力院義導講 越後は眞宗寺院の多いだけに學僧を出すことも多い、此講も越後の景清寺とて、惡七兵衛景清の後

と稱する寺から出た人である、後には近江國唐川の長照寺に住職せられた、師は最傲岸で苟も人に下るといふことを爲ない人で有つた、或る時他に招かれて往きしに床に頼山陽の軸が掛けてあるを見て、失敬な此方の來る所に斯る破佛家の軸を掛け置くとはと言て、忽ち家人を呼んで取り替へしめた、又或る時名古屋に至る、時に縣吏に師が傲岸にして數々人を凌ぐのを知て居るものが有て、何がなわの和尚をへコマしてやらんと思ひ、按を叩て善き法ゴザンナレ、あの和尚性來書を畫く能はず之を依頼せんとて、絹地を持し菓子箱を副へて刺を通じ面會を求め、懇に畫を書かれんことを請ふ、師良、案じて曰う、かしてまりました、乃ち小僧に命じて、畫を書くから墨を濃く摺れ、ソシテ太い筆を持て來いと、シテ墨すれりど報するや、太い筆に墨を善く含ませしめて、ポツリ〜と絹地に塗り付け、切言うやう是炭團を畫けるかりと、依て上に讀して與へたりと、

師の壯時 斯くまで傲岸な人で有つたが、又やさしい所もある、師は壯年時代に已に擬講に補せられ、大得意で京都から歸國した、此時分眞宗僧侶が擬講に成たのは、今の學者が博士に成た様に思ふ故、其得意知るべしである、越後地へ這入て信濃川を下るに、特別に一艘舟を僦うて侍者と二人で乗て下る、するとその舟と相並んで乗合船が一艘下る、船頭は互に話しながら行く中に雨が降り出した、師の船は特別であるから筈があれも乗合船は筈がなくて船客は皆濡れ鼠になる、中に一人の西本願寺派の僧侶(宗派を知る)が居る、師は氣の

毒に思ひ、己の船へ呼び入れて載せてやつた、夫から段々話が始つて、例の得意の時であるから、自慢話が出て、遂に西派には學者は無い、二種深信の扱の分つた者は一人も有るまいとて、傍若無人に其講釋を始められた、西派の坊様は争はずして始終黙聴して居た、其間に船も目的地へ着して共に上陸した、勿論自分の歡迎者も有たが、西派の坊様の歡迎者は猶一層多かつたから師も驚いた、夫から宿屋へどまるに向合て居る旅宿に別れて投宿した、師は沐浴も食事も済んでから、宿の主人を招いて今日向側の宿へ這入た坊様は何といふ人だど、へー彼方は與板の光西寺様でムリせず、是に於て師は二度吃驚して深く先刻の過言を愧ぢた、蓋し光西寺とは藤井宣界師にして、文學士藤井宣正氏の父、後には本願寺派の勸學に上りし人、其頃已に學匠の名ありしなり、其後深更宣界師の寓を叩く者あり、亭主起き出て戸を開けば、正装せる僧侶一人ありて是非共光西寺様に面謁し度と請ふ、時に宣界師已に寢に就きしも、亦正装して客を迎へたるに、客は正しく義導師でありて、丁寧に先刻の過言を謝して言ふやう、實は御尊名を聞いてから、ドーモ漸入て、一旦寢に就きしも眠られざる儘斯くの通り訖に來た次第なりと、茲に宣界師も大に感じて互に語り明し、其後無二の親友となられたといふ、善い話では無いか、

佛教辨士の評判 (一)

自稱辨士

佛教辨士といへば、高座に上りて一席のカキツケ法談を爲すものも、その数には漏るべからず候、かゝる辨士を一々に數へ立てなば恒河の沙も算ならず候、そは到底爲し得る業にあらざれば、今の所謂佛教辨士は四辨八音、雄辯四筵を驚かす、佛教大演説家と豫め御承知置相成度候

藹々大内青巒先生

佛教演説の泰斗として其人を求めば、何人も大内青巒先生を推すに異存はこれなかるべくと存候、先生の演説は今や老練自在の境に入り、聊かも難澁停滯の跡なく、滔々として、宛かも川を流るゝ水の如くに候、加ふるに滑稽百出、聽者をして時間の移るゝを覺るゝならしめ、平易通俗の間に、幽玄高尚なる佛理を領得せしむるは、先生ならでは出来難き技能に候、先生壯時の演説は活潑にして政治家風の仕振に候ひしかど、漸く老ゆるに従て全く其の風を脱し候、只時として講談に類する口調あるは、年來の苦心察するに餘り候、さは言へ先生の辨は天才なり、容易く學び得べからず候、たゞへその技能群を抜くものあらざるも、先生の如きは實に佛教演説の開祖ともいふべき人、其功は万代没すべからず候、况んや天稟の辨才なるに於てをや、當時教界に辨を以て立つもの、多くは先生の門人若くはその指導を受けしものに候、先生豊頬肥身、年五十七に候、

逕堂平松理英先生

先生が演説を使ひ始めたるは殆んど廿年前の昔に候、そのころ眞宗大谷派の東京青年の手によつて組織せられたる佛教講談會あるものあり、先生之を本陣として諸方に出戦を試みられ、大に伎倆を磨かれ候、十數名の會員中先生の演説は殊に活潑にして、常に派手を喜ぶ當時の青年に歡迎せられ候、然れども先生の演説を歡迎したるはその當時の青年にして今日の青年にはこれなく候、我輩先生を見る毎に、老驥伏櫪の嘆に堪えず候、先生身軀肥大、頗る惡口に長ず、年五十一二に候、

遠賀亮中先生

天台宗は由來佛教の方針なく、傳道教化の道に志すもの寥寥晨星も留ならず候、先生之を憂ひ、自から巡教使として各地に布教し、天臺宗の辨士といへば必ず先生の顔を見ざる可なきは、うの勵精願る嘉すべく候、然れども先生は演説に巧ならず、淳々として説くの親切はあるも、聲に抑揚なく、説に波瀾なく、聽者を倦ましむるに至るは是非もなき次第に候、先生議論家にして常に人と説を闘はすを好む、年は三十三四に候、

唯堂加藤熊一郎先生

先生は兩刀使ひなり、右手左手、隙間を見せずの勉強感服の外あく候、先生の演説は、語に張りもあり、句調も嚴かにして、慷慨志士の態度はあれども、言々肺腑を衝いて出るとは見受けられず、そは辨に任せて聽衆に迎へられんとするの希

望急なるが故にあるべく候、條理整然、議論は明晰なりと雖、巧妙の辨説あるがため、却て幾分の重みを減ずる様に思はれ候、自今東京と地方とを論せず、最も多く演壇に上るものは先生等三四人にて、當時佛教演壇の花形役者ともいふべく候、先生回顧して不邪婚會當時の昔に思ひ至れば、轉々今昔の感に堪へざらんと察し候、先生英姿颯爽、年は三十に候、

五十嵐光龍先生

目今眞言宗派出の第一師團軍隊布教師ある先生は嘗て大井馬城の幕下として各地に自由主義を演説せしこと之有候、その故に先生の演説は政治家風の口調ありて人氣を博し候、先生催眠術に巧にして、近來地方に巡遊する毎に、この術を施して老若男女を驚かし、以て非凡人的尊敬を受け居り候、先生躰軀肥大年三十六七に候、

紛々録

◎北海道のアイヌは日本人をシヤモと云へり、チタレン氏曰くシヤモは沙門の轉化なり、舊時最も多くアトメ人と交りたる日本人は佛教僧徒なりし故、遂に一般日本人を呼ぶに此語を以てするに至りし也

◎此説の當れりや否やは保し難し雖も、若し之が眞なりせば梵語のシヤマナを支那に移して沙門となし、之を日本に傳へ更にアイヌ傳へてシヤモと變じ、其意益々異りて日本人を指すに至りし順序なり

◎舊時の僧侶は今日の如く柔弱なるものにあらず、信念も厚く勇氣も強かりしなり、されば其布教の範圍も割合に廣く日蓮宗徒の朝鮮に弘教せしあり、臺灣の南部に六字の名號を我浄土宗風の書體にて記せる墓標あり、アイヌに沙門の語の傳へらるゝはた必ずしも理なきにあらず

信界

何をか信心といふ

上杉文秀

信心は宗教の生命である、殊に龍樹菩薩はいへり、「佛法の大海には信を以て能入とす」と、信心なかりせば佛教の眞味は知られぬのである、但し佛教を二分別すると聖道門といふ自力教、淨土門といふ他力教、聖道門自力教の信心は自己の智識によりて、生ずる信なれば、其の人によりて千差萬別である、淨土門の信心は他力より恵施せられるのであるから、智識の差降に拘はらず、情致の萬殊にも關からず、同一平等の信心である、但し信心を授與せられるといふことが、通常の考からいふと権に感せられる、が他力教の説き明かしてはどうでもなりなければならぬので、こゝは能く考へて見ねばなるまい、そして近頃は信仰の舊と新とを論するやうであるか、これも聖道門自力教なら新信仰は尤もであるが恵施せられる信仰に舊も新もあらう道理がない、して見ると淨土教他力の信心は如何なるものかといふ問題を出して、必ず一定の答が出来得るであらう、然り信心の妙味は何れど

◎龍樹及び琉球にては甘露をば唐芋と云ふ、而して一般内地にては薩摩芋と云ふ、其名能く傳來の序を指示するものと云ふべし、唐人草、ナランタイチゴの如きまた此種のもの

も冷暖自知の境であるけれども、或る度まではキツと試みか
出来ることに相違ない、然らば、信心の説明解答果して如何な
るものぞ、

浄土真宗の信心は、宗祖親鸞聖人と同意すれば足れり、宗
祖の信心は其を祖承したる蓮如聖人の教によるは最も捷徑で
ある、蓮如上人は之を教ふるに最も簡易を尙されたが、中に
就て其の信徒に授くるに僅々一紙に充たぬ信仰の簡條を定め
られた、改悔文といひ、領解文といふ即ち是なり、

其の簡條は凡そ四條、曰く安心、曰く報謝、曰く師徳、曰
く法度、安心とは正しく心のおちつきである、報謝とは此れ
に伴ふ感謝の念である、師徳とは此のおちつきが出来た心此
の感謝の念の溢ふる、に至りたる、それ迄の宣教師の撫育に
對する感謝の念である、法度とは信徒たる以上の資格を保つ
法則である、僅々一紙に充たぬ教示、四個の條規、若し其の
信徒たる人にありては、實に溢る、はかりの味ひであらう、
されば或る度まで語りても見むか、

吾人の宗教的意識、端しなくも一たび動き出してより或は
進み或は退き、右により左に避け、障礙の前より來たるあり、
惡魔の後より襲ふあり、得手のよきときに貪愛の情走り、都
合のあしきときに瞋恚の火燃上る、終日之を思ひても未だ正
道に進む能はず、終夜之を案するも猶邪路を避くる能はず、
而して多數の日月を経るも會て心中の大安慰を得ず、頃刻の
間も猶且つ胸裏の苦悶を退くるを得ず、賢者の教を聞くある
も焦石に水を打つ如く、君子の善行を見るも徒ちに渴仰の思

施なりけり、

然り而して吾人の今の信心は不動なり、不動の念は動いて
感謝の念と成れり、感謝の念は相續して未だ断ず、相續の
念は即ち發して口に動き手に舞ひ足に踊る、如何に動けりや
南無阿彌陀佛は是れ、如何に舞ふや如何に踊るや南無阿彌陀
佛を説かむとなり語りむとなり捉らしめむとなり行はしめむ
となり、己れを行ふ所以の者、恐くは宗祖知識の誘導によら
すむばならず、之を思ひ之を念す、

而して吾人の身體猶有限の境界にあり、吾人心情猶相對不
完全の發作を免かれず、之を誡めむか、之を慎しまむか、即
ち賢者の遺訓は此に其の効果を顯はし、君子の善行は此に能
く吾人の啓導を爲せり、吾人此れによりて乃ち南無阿彌陀佛
の信徒たるを得たり、
此れが他力教の信心である、終りに臨みて一言を附せむか
如此信心如何にして領得すへきかと、人若し問ふあらば、餘
興ながら一の昔話を呈すべし、請ふ之を諒せよ、
一句やりました、何が出來ました、マア發句ですか、何々
『眼の下に見る富士の山』分りませぬ、富士の山は三國一の
高き山、さて夫れが眼の下とは……
お待ち下され、此れは拙者の不調法、上の五文字を脱しま

した『餘の山を』……
親鸞聖人の如き信心、蓮如上人の如き信心、得たい、どうも
く得たい得たい、得られぬ、とばかりいふ人は、是れ徒
らに下の十二字ばかりで考へる人である、嗚呼、上の五文字、

ひのみ、意も、行も、契はす、願望亦空しく消へなれど、往か
むか、能はず、還らむか其の方を得ず、進退難れ谷まるの
處、此に無明昏闇の間、一道の光明を得たり、叫喚苦悶の裏
に慈悲救済の聲を聞けり、汝ち迷ふ勿れ、汝ち恠しむ勿れ、
心一つにせよ念を正しくせよ、我れに汝を守護するの能
あり、我れに汝を誤らしめざるの徳あり、右によるの心を捨て
よ、左に避くるの意を用いされ、前後亦他の能を括むなれば
彼此の分別に驅らるる勿れと、噫吾人は此に於て自己の心中
亦苦悶なし、胸間一片の疑問なし水も恐る所ならず、火も亦
懼る、所ならず、縦令火に燒かるも水に溺るるも、救済者の
聲のあらむ限り、啓導者の光明の見ふる限り、吾人の命のわ
らむ限り、吾人の命令將何れにかゝる、吾人窮苦の生命は
今や永く捨てたり、今は永き限りなき生命を賜りたり、此の限
りなき生命のあらむ限り然り限り限り無く吾人の心中は
大安慰を得たるなり、而して吾人に此の限り無き生命を附與
したるは抑も亦誰れ人ぞ、吾人は其の限りなき生命の人たる
を知り、吾人に限り無き光明を與へたるは、其の限り無き光
明の人たるを知る、限り無き生命、限り無き光明、吾人は之を
阿彌陀佛と名くと聞けり、而して吾人の此の安慰、之を南無と
いふと聞けり、嗚呼吾人は知らずく阿彌陀佛に南無したり
けり、南無せしめたるの能は阿彌陀佛にあり、阿彌陀佛全體
の能は吾人の南無にあり、此によりて吾人は救はれたり、此
によりて吾人は迷界を脱したり、吾人の宗教的意識は此の阿
彌陀佛に充たされたり、是れ吾人の信心は全く阿彌陀佛の專

救の聲を聞くべし、慈悲の誓を味ふべし、……

謹賀 新年

藤岡兄持來り矣候哉貴書拜見仕候、嗚呼二年夢の如く過ぎ去り申候、爲法御靈障
の段感謝教候三宣亭の電話談を聞き何となく懐かしく感じ候、必ず通信書き可申
隨分爲法御自重第一に奉存候頓首
(獨乙より) 常 観

一別已後諸兄へ非常に御無沙汰仕り失禮仕候、仙郷再び新年を迎へ歳月勿々之感
に不堪候、一昨三十日夜藤岡兄を迎へ來連日連夜諸兄の御消息を承り懷徳の情
に不堪候、茲に謹て諸教兄の御健康を祝し、爲法御自愛を祈り奉り候頓首
近 角 常 観
船も陸も無事で、こについて、めづらしい新年をむへた當地に居る諸兄みな健全、
日々集りて故郷のうはさをするはがりなり、あたらしき新年と共に諸兄がます
法の爲に盡力せられん事をのります
藤岡 勝 二

今 昔

前田利家

百目木劍虹

第二章 祖先

尾張の人なり 尾張國一頼朝一信長一秀吉一菅原道

真一荒子城主一紛亂の世一利長一白石

前田大納言利家は尾張の人なり、天文七年(一五三六)十二

月廿五日愛知郡荒子城に生る、

そも尾張の地や廣袤大ならず約一百方里、之を帝國の全面
積二萬七千方里に比せむか、その百一にだに及ばざる遠し、管

に数字の上より見れば敢て重きを帝國に置かざる如しと雖も、開闢以來二千六百年、帝國歴史の最も重要な部分に於て、暫み些々たる此一州を除て説明する能はざるを知らば、如何に帝國史上活動の舞臺となり、勢力の中心たりしを悟り得む、史家多く國勢發展の狀に鑑み、帝國史を分ちて二期とし、劃するに平氏敗亡幕府創設の際を以てす、奈良の美術、平安の文學、前半の時代に於て云ふべきもの敢て乏しからざるも、之を中央の一局部に限られし文物を天下に及ぼし、暗昧なる境遇より脱して躍々たる國民的活動の社會を現出し、延びて現代の文化を導きたる後半の時代に比せば、その輕重必ずしも知者を待たざるなり、然り而して中古藤氏專擅の權衰へ、平氏代りて天下に號令し一代の榮華を極むる際、關八州の壯夫を率ひて一聲之を西海に沈め、京師中央の權を收めて府を鎌倉に創め、局面此に新たなる所謂幕府の創設者源右府頼朝は何人ぞ實に尾張熱田の人ならずや、鎌倉幕府の後、尊氏府を室町に開きしも、尾大の弊政は暫くにして足利氏威を揮ふ能はず、天下騷然、群雄競ひ起て互に鬪ぎ、搏噬攘奪劍戟相應して哀々聲あり、閃々火あるの時、強を挫き逆を懲し、撥亂反正の功を奏し、尊皇の大義を顯揚し、百姓を塗炭の苦より救ひたる半朝臣信長は滑洲の一城に崛起し、此國の總綱を指揮して宇内を箝制せしならずや、信長中道にして仆るに當り、風雲に際會して忽ち狂逆を誅し、威武赫赫、雄群を膝下に隨へ、位入臣の榮を極め、更に兵を遠く鷄林の野に發ちて八道を蹂躪し、朱明の朝廷を震慄せしめ、國威宣揚

の壯舉を演じたる太閤秀吉其人また尾張中村の人なり、信長秀吉の際には我戰國時代の風雲最も酣に、國民尙武の氣象最高潮に達して大活動を爲せる時あり、而してまた尾張國が最も史上に重要な位置を占めたる時なりとす、秀吉死して後ち徳川氏の世となり、泰平無事殆むと三百年、家康の第八子義直此國に封せられ、三親藩の主位に在て威靈將軍に亞ぎ、尾州の名久しく士民の尊敬を受け、文學技藝の士交々出て、能く文化の指導者となり扶植者となりて貢獻する所多く、遂に明治維新の初めに及ぶ、誰人か近代史上、此國の價値の偉なるを拒む者ぞ、而して利家は、信長秀吉を始めとし、一代の武將鬼柴田勝家、鷄林を潤歩したる勇將加藤清正等幾多の俊髦と共に、戰國時代の風雲漢々たる時此國に生れたりとす、家譜に曰く彼は當道相道眞の遺血を受くるものなり、醍醐の朝、道眞の寵遇は當時朝廷に彌蔓せる藤原氏の妬む所となり、時平以下定國菅根等の説に依り、西陲筑前大宰府の權帥に貶せられ、止まること三歳、延喜三年を以て薨す、道眞の第五子淳茂、右中辨式部大輔大學頭正五位下文章博士と爲り其子在躬、在躬の子輔正並に右中辨と爲る、輔正の第五子忠貞寛和三年正月を以て生れ尾張に居り原田前田兩氏の祖たり、天喜五年九月十三日卒す年七十三、其第一子安明は原田式部頭と稱し、第二子仲章前田尾張守と號し從五位下たり、爾來永く前田を以て姓と爲す、蓋し之を以て姓とするもの海東郡前田村あり當時其居此に在りし故ならむ、仲章より後ち仲國、仲房、仲行、行忠等子孫相繼ぐと雖も、家聲沈淪微に

して聞えず、誠思なる道眞の尊き遺血は、哀れ空しく草莽の間に隠れ、鎌倉幕府創設の大事變は如何なる影響を被りしや將た南北兩朝の大戦闘には如何なる舉措、出でたりや、奮として之を知るに由なきなり、其然る所以のもの深く世の下層に埋没され、世態の推移に關かるなきに依らざらむや、此の如きもの十數世にして仲利あり、又次郎と稱し康正元年五十五歳にして歿す、其弟忠重、忠重の子忠廣、薙髮して德善院を以て法印と號し、秀吉に仕へて丹波八上城主となり五萬石を食み五奉行の一に撰まる、仲利の長子種利前田村に居り豪族を以て聞ゆ、其弟利成は前田藏人と稱し愛知郡荒子城主たり、永正五年十一月十三日卒し道譽と號す、其子總殿助利春、父に襲きて荒子城主と爲り、竹野氏を娶り六男二女を産む、長子藏人利久、次子三右衛門利去、三子五郎兵衛安勝、利家は即ち第四子にして、道眞より二十五世の裔孫に當り、德善院を以ては從兄弟たり、

家譜の記す所大要此の如しと雖も、之を外にして其確否を考證すべき史料一として存するなし、其然る所以のもの、中葉にして名望の聞へなく、家聲零落世の顯る所どならざりし故ならむと、應仁以來天下亂れに亂れて、戰闘止む時なく、弱は強の肉となり秩序壞廢して綱紀地に落ち、妖雲濛々として酸風悲雨海内を荒涼し、興亡時を隔てず、榮枯轉瞬の間にあり、堂々たる國主も忽ち下て流民となり、一分の走卒も直に上て領主となる時、王侯將帥豈また種あらむや、英雄非凡の士壘畝の間に崛起し、鋤犁を抛て劍戟を手にし、蛟龍雲雨

を得てまた地中のものにあらず、赤手名を爲し家を興すものそれあからずや、然れども匹夫の出と稱するは人心收攬の術に巧なるものにあらず、此に於てか英雄世を築き自ら名門貴族の裔と唱へて己を尊くす、徳川家康何人ぞ、毛利元就何人ぞ、云ふが如く果して新田氏の後裔なるや大江廣元の子孫なるや、
(此項未完)

新刊紹介

○日本宗教風俗志 麻布區飯倉町五 森 江 書店
加藤晴堂の著書、全部三編、五百有餘頁の大冊より成る、第一編は總叙と題し我國の過去並に現在に於ける宗教風俗を歴史的、批評的に叙述觀察し第二編は地方志と題し五畿八道及び沖繩臺灣等の各地方に行はる、凡ての宗教風俗所謂神佛を初めし天理蓮門等の淫祠邪教までトナカミ、オヌクモリ、穴守稻荷、館樂師の類に至る迄殆ど遺憾なくこれを網羅し第三編は結論と題して我國に於ける宗教の分布如何日本の地理地勢、宗教風俗に及ぼすの影響如何等に就いて大に確查論究する所ありたり著者はもと宗教専門の學者、演説家、本書を編するに恰等の地歩を占むるは勿論ながら其考證の該博と叙事の精細に至つては何人も一驚を喫するなるべし殊に其行文の流麗、觀察の明敏は以て本書の趣味を一層濃厚ならしむ想ふに本書は専門に宗教に從事するものに取りて最も有要の書物なるのみならず我國民の智識信念が那點にあるかを知らんとするもの是非一讀を要すべきものたり(定價一圓五十錢)

稟告

本紙儀印刷所元眞社に於て機械破損の爲め定期刊行日に相後れ候段不惡御容謝願上候也
三 月 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十五年三月九日(日曜日)午後一時半
 上野公園東京音楽學校奏樂堂に於て開會
凍遭難軍人弔慰慈善音樂會弘告

入場券 一等金貳圓二等金壹圓三等金五拾錢
 (開會當日當場入口に於ても購求することを得べし)

會主 大日本佛教青年會
 東京市本郷區森川町一番地

轉居 本郷區森川町 有馬祐政
 二十番地

鑽毒被害民救濟義捐金第二回報告
 美濃揖斐郡遍光寺取次

- | | | |
|--------|----------|---------|
| 二十五錢宛 | 小川長左衛門殿 | 野原 靜 神殿 |
| 二十錢宛 | 野原 萬 彌殿 | 小林兵五 郎殿 |
| 十錢宛 | 中村甚四 郎殿 | 森定五 郎殿 |
| | 林 松 平殿 | 森 平 次殿 |
| | 野原吉太 郎殿 | 森 孫 平殿 |
| | 森 爲 次殿 | 森 文 吾殿 |
| | 野原小三 郎殿 | 野原 市 藏殿 |
| | 中村捨之 丞殿 | 野原 市 藏殿 |
| 十五錢宛 | 森 仁 兵 衛殿 | 森 虎 吉殿 |
| 十二錢五厘宛 | 林 七 藏殿 | 森 德 吉殿 |
| 七錢五厘宛 | 野原 久 松殿 | 小林富之 丞殿 |

- | | | |
|------------|---------|--------------|
| 五錢宛 | 中村元五 郎殿 | 森 甚 松殿 |
| | 野原萬之 丞殿 | 白井とみ 殿 |
| | 林 菊 藏殿 | 小林又十 郎殿 |
| | 森 こなみ 殿 | 野原萬三 郎殿 |
| | 森 藤 次殿 | 中村五郎 作殿 |
| | 土岐松兵 衛殿 | 外十二名 |
| | 野原吉三 郎殿 | 神奈川縣都筑郡眞照寺取次 |
| 三十一錢 | | |
| 三十錢 | | |
| 二十錢宛 | 加藤 佐 七殿 | 雲井 法 雲殿 |
| 十錢宛 | 加藤繁太 郎殿 | 藤井 圓 秀殿 |
| | 加藤 茂 八殿 | 加藤桑五 郎殿 |
| | 飯島喜助 殿 | 近藤忠右 工門殿 |
| | 角田藤五 郎殿 | 角田倉之 丞殿 |
| | 角田小次 郎殿 | 服部 致 一殿 |
| | 角田 浪 藏殿 | 澤 新 七殿 |
| | 角田源兵 工殿 | 城田竹次 郎殿 |
| | 角田紋太 郎殿 | 加藤鐵五 郎殿 |
| | 宮森萬吉 殿 | 飯島 權 藏殿 |
| | 角田 佐 吉殿 | 加藤 か の殿 |
| | 角田三四 郎殿 | 角田 倉 松殿 |
| | 角田 濱 吉殿 | 角田 米 吉殿 |
| | | 加藤孫太 郎殿 |
| 計金六圓九十一錢 | | |
| 累計金四十圓三十三錢 | | |

號二第卷二第

家庭

每月一回(五日)
 一部金八錢
 半年四十二錢

家庭

◎家庭と病氣(近藤純悟)◎子守歌(東京地方)◎子
 を見ること親に如かず(南條文雄)◎春の囁
 き(桑田たつ子)◎女子の理想(四月)◎村上家の
 家訓(岩上)◎料理法(大橋久子)◎はが家の猫
 (逆山)◎印度婦人の風景(赤松天尾)◎家庭日
 記◎蓬萊日記(美輪てい子)◎元日の家庭(藤七
 ▲壬寅日記(池田七草)◎七草日記(登志)◎裁縫
 問答(木村)◎幸あれな(夢)◎看病婦(遠水)
 ◎天然はなじ(曾我)◎人あて(西ラ)◎心
 界百話(今井)◎新年の梅(白野春翠)◎交際法
 口に就て(竹内)◎各の村(杜葉)◎衛生雑話
 (鷗)◎子さも(坊)◎花笠(洲)◎家庭の諧
 調者(この家畜)◎美音の少女(けい
 生)◎亡友を憶ふ(運)◎らんぶ物語(やせ)
 ◎東京たより◎鷺城たより(衣羽)◎筑紫
 たより(筑紫)

所行發庭家一四二の一町川森郷本京東

家庭

一年分八十錢
 (郵税共)
 切手代用一割増

家庭

精神界

毎月一回◎一部金拾貳
 錢壹半分壹圓二拾錢

日要行發(二の二)日十月二

新信仰

旅僧

宗教

本性を維持する事

歸命

若き姉姉へ

正信偈註

精神主義と三世

容觀

一念永切の問題

安田靈感

月下の流車

青鬼

佛齒寺の金堂の圖

常住

釜山

法王子

虎石 巫賢
 小花 生

楠 龍 造
 エビクテマス

萩野 伸三 郎
 青 鬼 堂

多 田 鼎
 (精神界)

清澤 藩之
 (精神界)

曉 鳥 敏
 野田 四 山

眞 岡 浩 澄
 中村 不 折

佐々木 月 樵
 寺本 婉 雅

解 釋

東 京 市 本 郷 區 森 川 町 一
 の 二 四 一 活 々 洞 發 行

鑛毒被害民救濟義捐金募集の概

天災恐るべしとせば、人の災禍亦怖るべきものならずや、水火風震の罹災者憐むべしとせば、鑛毒の爲めに害を被るもの亦大に憐むべきものならずや、惟ふに足尾銅山鑛毒の害ありてより、來茲に廿年、洪水起る毎に被害の地を増し、良瀬川沿岸の一帶、漸く不毛の地たらんとして、其面積六萬町歩、此間に居住して害を被る人民實に三十萬人、之と府縣に亘り、之を村落に當つれば、新村にして百三十六ヶ村、舊村(字)にして八百餘村に及ぶ、毒や之に止まらず、年々其に蔓延して、漸く麓の下の浸さん、豈恐れて怖るべき事なからずや、而して此等被害民は、産を傾け、家を失ひ、業務に離れ、一族離散して見る影もなき姿となり、人の養ふ能はざるらん、とするところを家にして露を凌ぎ、人の住むるも、病も生ず、死も生ず、病むも醫なく、苦しむるも、況んや教育救済に於てとや、冠婚葬祭に於てとや、人生の悲夢豈之に過るものあらんや、吾人同志茲に計りて鑛毒被害民救濟有志會を興す、益し、世の鑛毒問題に向て解決を試みんとするものにあらず、吾人は吾人が奉ずる佛敎の本旨に基き、茲に廣く天下の仁人に訴へて、直に被害民救濟の事に従はんとす、嗚呼、寒威凜烈、涼風肌を裂かんとす、飽食暖衣、尚且つ耐ゆべからざるの感あり、憐れなる彼等無告の被害民、今將た如何かせし乎、一念に及べば、轉た同情の涙禁じかたし、哀れ世の仁人君子よ、念ぎ翼くば、吾人と志を同うして、彼等被害民の爲に應分の義金を捐てられんことを

- (一) 義捐金は多少を論せず、有志者の芳志に任ず
- (二) 義捐金募集の期限は來る三月三十一日迄とす
- (三) 義捐金寄附者の金額芳名は之を政教時報に掲げて領收證に代ふ
- (四) 義捐金は下名宛に送られたし
- (五) 義捐金は期限後適當の方法によりて有効なる救済を爲す

東京本郷森川町一 大日本佛教徒同盟會

發行所

加藤熊一郎先生新著 〇全一冊

日本宗教風俗志

洋裝菊版金文字入 正價金一圓五十錢
紙數五百五十頁 郵税金十四錢

日本の宗教風俗は、一種異様の状態をなせり、婆羅門入り佛敎入り儒敎入り道敎入り別に固有の神道有り相混和して雜多の信山嶽星辰動植物生殖器等の崇拜となり、禁厭祈禱祭典、法要に關する奇異ある風俗、俗に於ては日常の習慣も亦此の感化を受け、佛敎の緣起傳説に就ては國民信仰状態を想見者、其の地に踏み先づ我が國宗教風俗の變遷を叙して現今及び且つ全國々別に其宗教風俗を叙し著名宗教地圖並に宗教分布圖を以て、他地理地圖の好參考たるべし、勿論又以て他地理教科の最も趣味ある者たり

發行所 東京市飯倉 町五丁目 **森江書店**
本郷春木町二森江分店、文明堂、光融館、
鴻照館、通俗佛敎館、銀座二服部

大日本佛教徒同盟會出版部